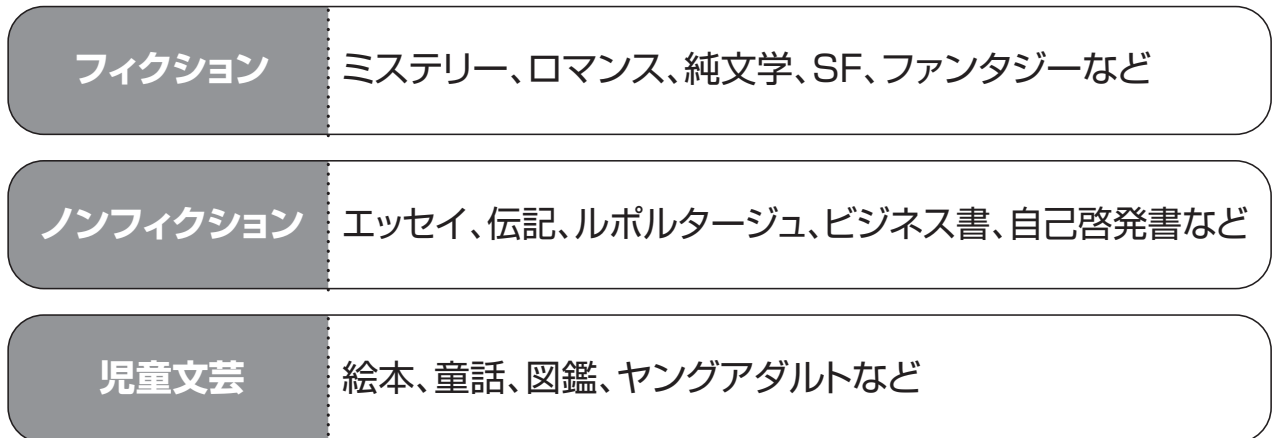
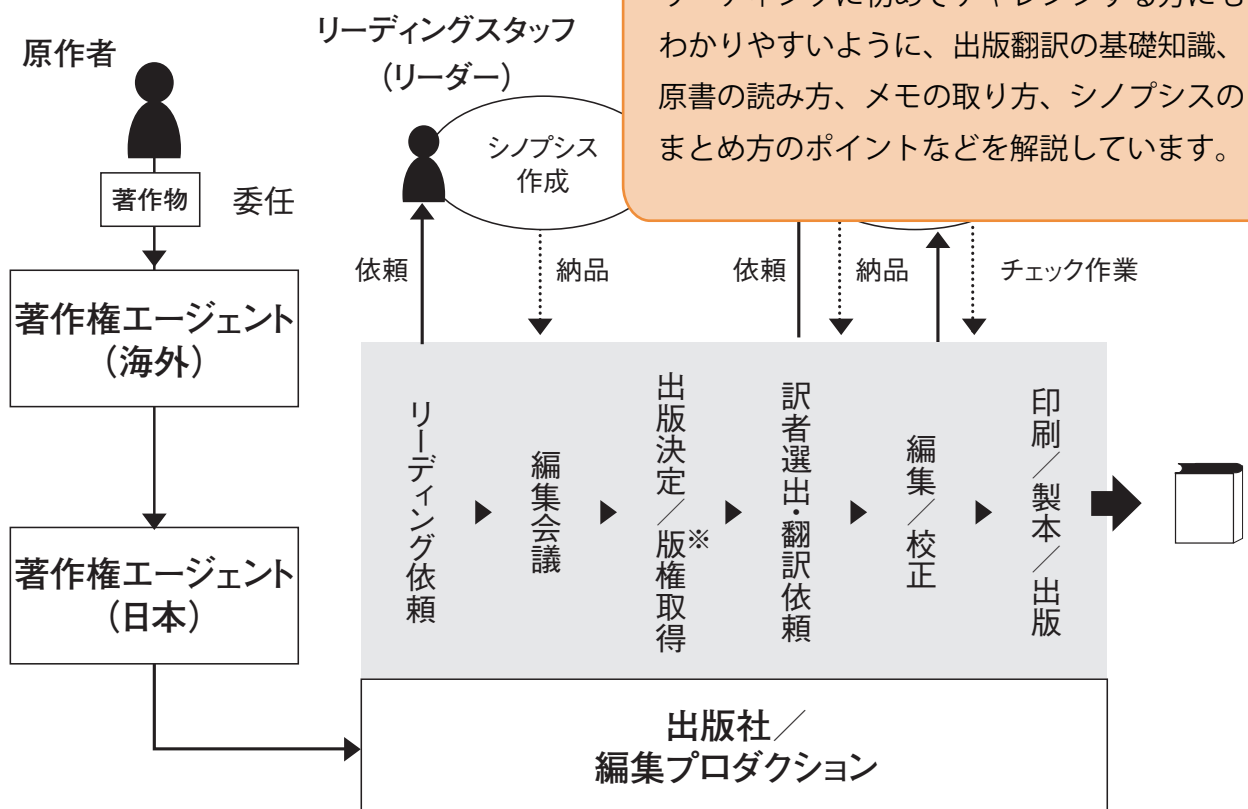


■ 出版翻訳の基礎知識

出版翻訳とは、海外の著作物を日本で出版することを目的に行われる翻訳です。出版翻訳の対象となる著作物は、主に以下のジャンルに分かれ、日本で翻訳出版されるまでの流れは下図のようになります。



● 出版翻訳の仕組みと仕事の流れ



※著作権とは？

出版社が主に著作権エージェントを通じて取得する著作権のことを、通称「著作権」と呼ぶ。

■ リーディングの仕事

リーディングとは、原書を読み、あらすじや感想・評価をシノプシス(またはレジюме、こうがい梗概とも呼ばれる)にまとめる仕事で、主に出版社や編集プロダクションが、翻訳者や翻訳学習者に依頼します。また、リーディングを行う人をリーディングスタッフ、またはリーダーと呼びます。

あらすじ、評価、類書との相違点、日本のマーケットに合う作品かなどをまとめたシノプシスをもとに、その本を出版するかどうかを検討するので、リーディングは非常に重要な仕事です。また、出版社からは「シノプシスには、作品の理解力や文章力が如実に表れるので、将来翻訳を依頼するかどうかのひとつの判断基準になる」という声も聞きます。

リーディングの経験を積むと、原書の構造やストーリーの流れ、著者のメッセージなどを正確につかむ力が向上しますので、翻訳も上達していきます。

■ 出版市場の動向を知ろう

出版翻訳やリーディングの仕事をするには、市場の動き、各出版社の傾向などを知っておくことが大切です。こうした情報を手に入れるには、主に以下のような手段があります。

①書店に赴く

書店の売り場の様子をじっくり観察すると、出版社や書店の動向を知ることができます。たとえば、目立つ場所に平積みになっていれば、今売れ筋の本ということになりますし、ポスターやポップを見れば、出版社や書店が力を入れている本がどれかもわかります。

また、先週平積みだったものが、今週は棚に1冊しかないといったように、書店の商品展開はめまぐるしく変わります。そのため、書店での取扱期間が長い書籍はよく売れているということになります。こうした本の売れ行きについてもチェックしておきましょう。

■ シノプシスのまとめ方

シノプシスを作成するにあたって重要なことは、編集者がその作品を翻訳出版するか否かの判断材料にできるよう、作品の内容を正確かつ簡潔に伝えることです。客観的に読んで、日本で翻訳出版する際にマイナス要素になると感じた点があれば、具体的に書くことが求められます。

●シノプシスに盛り込むこと(一般例)

- 原題
- 訳題(自分なりに検討してつけた仮タイトル)
- 出版社名
- 出版年(初版が出た年)
- 著者名
- 著者のプロフィール

原書に掲載されている情報や、インターネットなどで調べてわかることを併記。

たとえば、代表作や日本で翻訳出版された作品の情報、受賞歴、本国での評価など。

- 総ページ数
- 概要(本の背表紙にあるような作品の簡単な紹介文)
- 目次(ノンフィクションのみ)
- 主な登場人物(ビジネス書や実用書などの場合は不要)
- あらすじ

シノプシスを読んだ人がストーリーを正しく理解できることが大切。読み手への伝わりやすさを優先するため、ストーリーの順番を多少入れ替えても良い。また、一人称視点で書かれている作品のあらすじは、一人称視点でも三人称視点でも構わないが、どちらの視点で書かれた作品なのか、シノプシスに含めておくと良い。

• 所感

感想だけではなく、市場性、類書との比較、ターゲットとなる読者、そのほか特記事項などあれば盛り込むと良い。

リーディング講座

児童文学

CHILDREN'S BOOKS

●執筆講師

こだま ともこ

Tomoko Kodama

児童文芸翻訳家。「ダイーの冒険」シリーズ(富山房)、「大草原の小さな家」シリーズ(講談社、共訳)、「レモネードを作ろう」(徳間書店)など訳書多数。

II 児童文学の読み方

児童文学の世界に足を踏み入れてから早くも40年あまりが過ぎてしまった。その長い年月、個々の作品や作家について、編集者や作家や他の翻訳者と話し合ったり、質問されたりすることはあっても、児童文学の読み方そのものについて、あらためて考えたことはなかった。それは別に私が怠け者であるからではない。さくまゆみこさんや福本友美子さんとの共訳で出した『子どもの本の歴史』(柏書房)で、編者のピーター・ハントが述べているように、そもそも「子どもの本とはなんぞやという質問に答えられるひとは、世界じゅうどこを探してもいない」からである。いったいどこからどこまでを子どもの本というのか。子どものためにだけ書かれた本のことなのだろうか。それなら、本来大人向けに書かれた本を子どもが読んでいる場合はどうなのか。児童文学と一般に呼んでいるが、果たして子ども向けに書かれた物語を文学と呼べるのだろうか……等々、昔から子どもの本の世界では様々な論議がなされてきたし、いまでも様々なことがいわれている。このようにある意味では曖昧模糊とした存在であっても、世に児童文学というものが存在することはまぎれもない事

各ジャンルのテキストでは、そのジャンルの特徴、読んでおきたい参考図書、経験豊富な執筆講師のアドバイスなどを紹介しています。まずはテキストで選択したジャンルの理解を深めてから、課題作品を読み始めましょう。

たいと忘っている人たちがいるわけである。

わたしは、将来児童文学の仕事をしたと思っている人へのアドバイスをと求められたら、とにかく「うんざりするほど、子どもの本を読むこと」と、答えることにしている。わたし自身も「子どもの本はどう読むべきか」と考えるまえに、まず山ほど子どもの本を読んできたつもりだし、わたしの周りには児童文学の作家、編集者、翻訳者も、そうしてきたことと思う。だから、これから児童文学の世界に入る人たちにも、鬱蒼と茂った子どもの本の森の中で、自分自身で「児童文学とはなにか」をさぐってってもらいたいし、とくに次世代の人たちには、従来の「子どもの本」の枠を超えた仕事をしてほしい。だから、こういう近道がある……というようなことは絶対にいたくないし、ブックリストみたいなものも

